

The 9th FAOPS Congress; Mini Luncheon Seminar 報告  
“Seeking Gender Equality in Science. A comparison of issues and initiatives  
in Japan and New Zealand.”

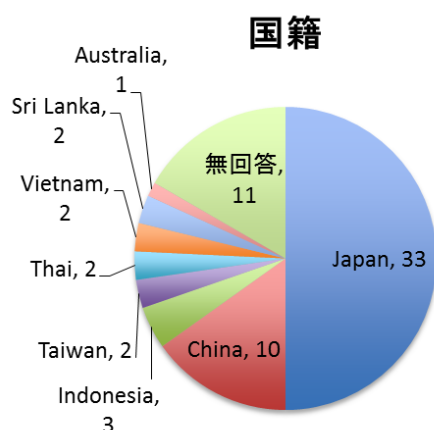
2019年3月29日（金）12:20–13:20 開催

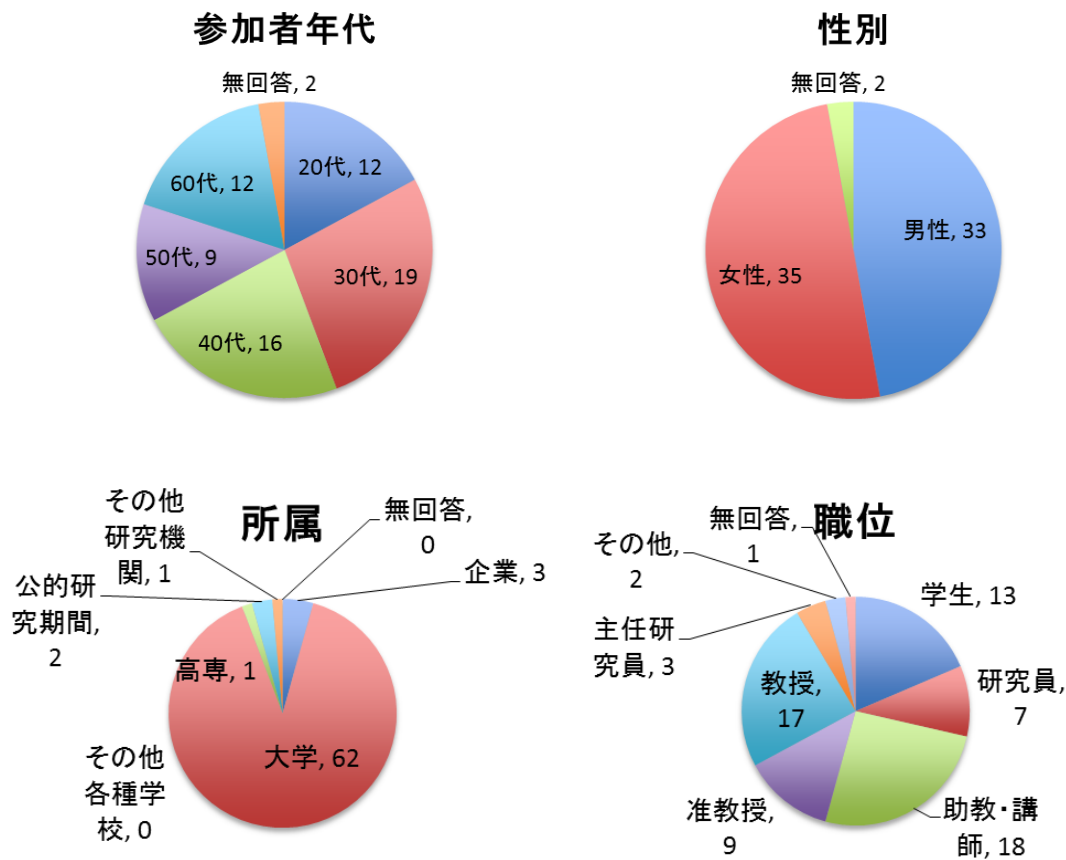
日本生理学会 男女共同参画推進委員会

【概要】大会第2日目3月29日国際展示場 Room Mにて、日本生理学会男女共同参画推進委員会企画のミニランチョンを開催した。オーガナイザーを同委員長の齋藤康彦先生（奈良県立医科大学医学部第一生理学）と同委員の西谷(中村)友重先生(国立循環器病研究センター 分子生理部)が担当し、プログラムは① “Summary of the 4th Large-Scale Survey of Gender-Equality status in scientific professions” 西谷(中村)友重先生、② “Making room at the table: Gender equality initiatives at the Okinawa Institute of Science and Technology Graduate University” Gail Tripp 先生（沖縄科学技術大学院大学; OIST）③総合討論で構成され、英語で行われた。様々な国籍の研究者が参加し、盛会のうちに終えた。

以下は参加者の内訳、要旨と参加者アンケート（70名）の報告である。

【参加者の内訳】円グラフ中の数字は人数を表す。国際学会であったため、日本人と無回答を除いたアジア各国からの参加者は22名であった。参加者年代は20代~60代までの幅広い参加者があり、30代と40代の参加が最も多かった。性別は男性女性が半数ずつ、所属は90%が大学であった。学生19%、研究員10%、助教・講師26%、准教授13%、教授24%、主任研究員4%であった。全体の参加者において学生、助教・講師、教授が多かった。





① “Summary of the 4th Large-Scale Survey of Gender-Equality status in scientific professions”

西谷(中村)友重先生

大規模アンケートの目的は、1) 科学技術専門職の実態把握と課題の抽出、2) これら課題を引き起こす社会構造の解明、3) データに基づいた提言・要望活動を行い、改善していくことである。解析結果から、1. 基礎データ、2. 雇用形態（任期の有無）と男女差、3. 仕事と家庭の問題、4. 男女共同参画を推進するために、5. まとめ、の順で紹介された。1ではアンケート回答者の属性（年齢・性別・学歴・所属先等）が示され、約 18,000 人中、3 割弱が女性回答者、6 割が博士号を持ち、6 割が大学所属であった。2では雇用形態（任期の有無）、給与、希望する職業及びその男女差が示された。女性は全体に昇進が遅く給与が低いこと、希望する職業は、男女とも「アカデミアで働く」が 1 位だったが、以前男性で 1 位であった「PI 希望」は 2 位になっていた。3では男女とも既婚率・子どもの数が一般職と比べ少なく、その理由として女性では仕事と家庭の両立が困難なこと、男性では経済的理由が挙げられた。また女性研究者の半数近くは別居経験があり、科学技術専門職の問題が浮き彫りにされた。さらに、子育ては依然として女性により多くの負担がかかっていること、介護についても女性の方が関心を持っていることが明らかとなった。仕事と家庭が両立できる職場環境、社会的制度の拡充（各種サービス、経済的支援）が強く望まれている。 4では、女性の積極的雇用が挙げられるが賛否両論である。男性に比

べ女性の方が男女共同参画は進んでいないと感じる人が多いことが示された。5では、これらのデータを今後より良い社会にするために積極的に使うべきであることが述べられた。

参加者から（複数回答可、以下同様）は、興味深いデータで日本の現状が分かりやすかった（11人）、仕事と家庭の両立の困難さや男女間の考え方の違いに関するコメント（7人）、女性研究者のおかれた環境が不十分であること（家族の形成や仕事と家庭の両立）に対する感想や施策の必要性を述べた意見（9人）、大規模調査に基づいた改善策の有無、育児中の女性研究者や他の集団における有期雇用者と終身雇用者との相違の調査、給与の違い、男性研究者の子どもの少なさ、別居経験の多さなど参加者自身が持った驚きや興味、原因の解明を希望する意見があった（5人）。

## ② “Making room at the table: Gender equality initiatives at the Okinawa Institute of Science and Technology Graduate University”

Gail Tripp 先生（沖縄科学技術大学院大学; OIST）

1. OIST の特徴と男女共同参画推進の歴史、2. 注目すべき制度や施設の紹介、3. これまでの取り組みの良かった点、反省すべき点とそれらから学んだ点、4. 日本とニュージーランドの違い、について述べられた。1では、OIST の約半数の学生や教職員が外国籍であり英語が共通言語であること、男女共同参画は6年前から推進されていることが示された。2では Stop-the Clock 制度（出産、養子縁組、育児に関する保護者責任を果たすため、雇用契約の延長・審査の延期を求めることができる制度）や Dual-Career Couples に対し、両方に実力に見合ったポジションを与える制度、出張に係るサポート（学会中の子どもの交通費、ベビーシッター料の給付）制度が有り、また学内施設として保育園や授乳室も紹介された。3では、学内保育園やコア時間内会議等は効果が有った反面、女性応募者の採用やメンター制度はもっと改良すべきであること、これらに対し、一度きりのトライアルでなく何回にもわたって根気強く続けることが重要であることが述べられた。4では、ニュージーランドでは研究者の半数が女性であり 日本よりは男女の格差は低い、依然として女性の方が職位や給与が低い傾向にあり、世界的に共通する問題であることが示された。

参加者からは、Tripp 先生自身の経緯や OIST に関して強く印象づけられた（6人）、家族と gender に配慮されたキャンパスであることへの好意的な意見（12人）、一方では家族を優遇しすぎという批判、組織としての自己満足への警戒感、実際に利用している研究者の人数の調査、実験時間の長さから託児時間が長時間になることへの心配などの意見（6人）があった。

③総合討論 以下の質問が出た。

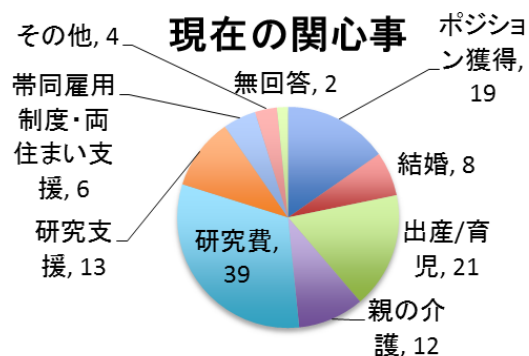
Q:OIST の活動は素晴らしいが、これをどうやって日本全体の大学・研究施設に広めたらよいか？

A:最初うまくいなくても諦めないで辛抱強く推進を進め続けることが重要。

#### ④その他

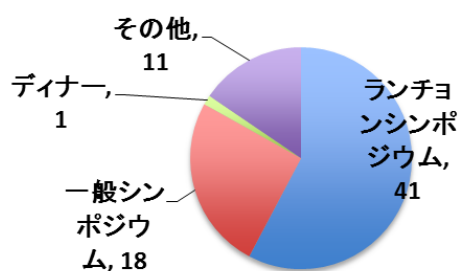
##### 【ミニランチョン参加者の現在の関心事】(2回答可)

もっとも関心の高い2項目にチェックを入れてもらった結果である。1位は「研究費獲得」31%、2位は「出産・育児」で17%、3位が「ポジションの獲得」15%、そして、「親の介護」と「研究支援」がそれぞれ10%、結婚6%と続いた。ポジションおよび研究費獲得と、家族や夫婦へのケアに関することが重要な関心事であることが示された。



【今後の男女共同参画推進委員会企画に対する要望】 今後の希望する開催形態は全体および日本人でランチョンシンポジウムが同様に58%であった。一般シンポジウムの希望も25%あった。参加者にとって充実した興味深い内容であり、じっくり聞きたいとの感触をもっている様子が伺える。しかしながら参加者の大部分はミニランチョン開始前1時間以内にランチョンチケットを入手して参加し、事前に予定された参加とは言い難い。以上を鑑みて、内容の充実を維持したまま、他のサイエンスセッションと重複しないランチョンの時間に開催することが望ましいと考えられる。

##### 今後の企画に対する要望



自由記述で参加者が企画に取り上げて欲しい内容としては、女性PIの成功例、男性PIの成功例・失敗例に基づいた研究室運営の上での心構え、逆に研究キャリアをライフイベントによって中断した例の調査、研究支援(教育、メンター、施策など)や経済支援(大学院生)、単身赴任や転校における困難さ、社会における性差や仕事と家庭の両立状態の調査結果、受けた教育課程や博士号の取得に関連した雇用における性別比の調査、研究者における精神疾患の性差、幸福度の高いスウェーデン・デンマーク・ノルウェーでの社会におけるgender問題のあり方が挙げられた。